

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：34101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520046

研究課題名(和文) 道教の成立およびその歴史的展開に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on the Birth of Daoism and its Historical Development

研究代表者

松下 道信 (MATSUSHITA, Michinobu)

皇學館大学・文学部・准教授

研究者番号：90454454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：道教の成立とその後の歴史的な展開について、時代ごとの道教研究や科学技術分野などの最新の研究成果に基づき、従来の研究を実証的・批判的に検証し、新たな道教史の再構築の可能性をさぐった。具体的な研究成果としては、主に任継愈編『中国道教史』(増訂本)を訳出し、研究成果を踏まえた精密な訳注を作成した他、また『中国道教史』の著者の一人を招き、皇學館大学において国際シンポジウム「道教史の新たな展望」を開催し、新たな道教史の構築の可能性を提示することができた。

研究成果の概要(英文)：Based on the most recent research results of several studies including ones from the field of science and technology and those investigating Daoism in different time periods, this study considered the potential for a new restructuring of Daoism's history through empirical and critical verification of previous scholarship on the birth and the historical development of Daoism. In order to publish the concrete results of our research, we translated the revised and expanded version of A History of Chinese Taoism, edited by Ren Jiyu, and provided detailed annotations based on the results of our research. We also invited one of the authors from the volume to Kogakkan University for an international symposium titled "New Perspectives on the History of Taoism," where we presented our conclusions on the possibility for a new restructuring of Daoism's history.

研究分野：中国近世期の道教思想

キーワード：中国哲学 道教 道教史

1. 研究開始当初の背景

ある対象を総合的・系統的に理解しようとする場合、それを発生・成立から現在に至るまで歴史的に通観するというのとは一つの有効な手段である。道教研究ではそれは道教史にあたる。

日本で著された代表的な道教史としては、窪徳忠『道教史』(世界宗教史叢書9、山川出版社、1977)がある。内容は、日本にまともして伝来することがなかった中国の道教についての紹介から始まり、道教前史として老荘・陰陽五行思想の解説を経て、道教教団の成立以降、漢代から清末までの道教史を通観したものである。さらに近現代の現状、民間信仰、そして東アジア諸国における道教の影響についても触れられており、全体してバランスのよい道教史となっている。

しかし研究開始当初、同書はすでに刊行から30年以上の年月が経ち、そこで記述される内容は最新の研究成果をふまえたものとは言い難い状況であった。もちろんその後、日本で道教史が執筆されなかったわけではない。しかしいづれも小部のものにとどまり、著者の専門に関する分野ではそれぞれ見るべきものも少なくないものの、記述範囲にかたよりが見られることが多かった。

そうした中で道教史という体裁を取ってはないが、注目すべきものとして野口鐵郎編集代表『講座道教』(全六巻、雄山閣出版、1999-2001)が挙げられる。これは、道教の神々・経典・儀礼・身体論・中国の思想や社会との関係・アジア諸地域との関係といった諸側面を多角的に捕らえようという意欲的な著作である。ただしこれは個別の論文を総合したものであり、道教の通史ではない。このため分野によっては必要な情報が欠落するという問題点があった。

一方、中国では、道教史に関する研究成果が陸続と発表されている。中でもスタンダードなものとしては、任継愈編『中国道教史』があげられよう。これは、もともと1990年に上海人民出版社から出版されたもので、その後、2001年に新たな研究成果をふまえて増訂され、中国社会科学院出版社から改めて出版された。執筆にあたっては中国道教研究の第一線で活躍する研究者たちが共同で担当しており、中国を代表する道教史の一つということができよう。

道教は中国において儒教・道教・仏教の三教の一角を占める。現在、これら儒道仏三教は相互の影響関係の中で展開したことが認識されるようになってきており、儒教研究であれ、仏教研究であれ、単独で研究が完結するという考え方はもはや通用しない。また体系的ではないにせよ、道教は周辺諸国にも影響を及ぼしており、日本でも神道をはじめとする諸分野でさまざまにその影響が指摘されている。つまり、中国研究においても、また隣接する諸研究分野においても道教の系統的な理解が不可欠なのである。

他方、仏教研究では、さまざまな通史が刊行されている。これにより、仏教研究者のみならず、関連諸分野の研究者、そして一般の人々の関心や需要に応じている。こうした活動は、仏教研究の研究水準を下支えし、さらに活性化させているということができよう。

こうした当時の研究状況にあって、手頃であり、かつ最新の研究成果を取り入れた道教史の提供は、急務の課題であった。このため新たな道教史の作成を支える、道教の成立からはじまり、現在に至る道教の歴史的展開に関する系統的かつ総合的な本研究が計画、実施されたのである。

2. 研究の目的

上のような研究状況の下、まず先行する各道教史や関連する研究成果を分析・検討を行うため、本研究では、一つのたたき台として研究期間内に任継愈編『中国道教史』(増訂本)を訳出することを目指した。この際、研究代表者および各研究分担者は、各時代の諸流派や科学技術といった分野ごとの最新の研究成果に基づき、必要に応じて注釈の形で、これを補足することを計画した。こうした作業は、おのずと日本と中国の研究の差異や視点の違い、それぞれの持つ限界といった問題点を浮かび上がらせることになると考えられたからである。またこれは訳注作業とあわせて計画されている研究例会や最後に開催されるシンポジウムにおける重要な論点にもつながり、加えてそうした議論が訳注にもう一度還元されることで、その作業は新たな道教史構築の可能性に向けた非常に意識的なものになることも期待された。

なお訳注の完成による成果は単に道教研究者の便に利するだけでなく、幅広い分野への還元も見込まれると考えられた。すなわち道教研究に隣接する儒教や仏教研究にとどまらず、歴史学や文学研究をはじめとする中国学の諸分野へ貢献することはもちろん、様々な形で影響を受けた神道や日本仏教、中国をはじめとする美術などの諸関連研究分野に大きな利益をもたらすことが予想された。

さらに最終的にシンポジウムを開催し、それまでの研究成果を総括することが計画された。シンポジウムでもたらされる知見は、従来の道教研究の限界と問題点を確認することになり、今後道教研究において研究が必要な分野の発見や、改めて道教史をどのように構築していくかといった次世代の研究の足がかりとなる積極的で有意義な議論になることが期待されたからである。

すなわち研究開始当時、日本では最新の研究成果をふまえた道教史が存在しないという現状があった。本研究ではこうした状況をふまえ、先行する道教史に対し、宗教・思想・文化・科学技術など諸分野にわたる最新の研究結果を用いてそれらを検証し、問題点の所在を明らかにした上で、最終的には最新の知

見をふまえた新たな道教史の作成の可能性を提示することを目的としたのである。

3. 研究の方法

儒道仏三教の内の一隅を占める道教は膨大な内容と長い歴史を持つ。その成立や各宗派の消長・展開は複雑であり、また道教を取り巻いて働く思想的潮流は時代ごとに異なる。すなわち道教の総体を歴史的にとらえるという本研究を遂行していくためには、特定の時代や一部の思想家・流派だけに偏るのではなく、多岐にわたり複雑に展開していくこれらの運動を遺漏なく見据えながら、同時に個々の思想家や運動を考察・解明していくことが強く求められる。

そこでこうした問題点に対応するため、本研究班は、それぞれ各時代・分野を専門とする研究者から構成された。すなわち、漢代の道教を高橋が、魏晋南北朝の道教を加藤が、唐代の道教を山田が、宋元の道教を松下が、明清の道教を森が担当し、これに加え、道教の中でも錬丹術や医学・天文学など科学と密接に関連する分野については、長谷部が担当した。任継愈編『中国道教史』の訳注の作成についても上記の専門に従い、それぞれ分担した。また研究協力者の蜂屋邦夫も老荘思想・金元の道教について補足した。その他、各時代や分野の研究が分裂・独立してしまわないよう、全体の総括・連携を蜂屋および松下が担当した。

またこれにあわせて、時代分野ごとの研究例会が年二回ずつ開かれ、その際、担当者はそれぞれ問題となる具体的な事象を取り上げて検討し、従来の研究成果の検証と課題を整理した。これは『中国道教史』の訳注作業とも連動するものである。

また2015年3月には研究全体の総括として、『中国道教史』の執筆者の一人である中国社会科学院の馬西沙教授および博士研究員の王皓月氏を招き、研究代表者の松下道信が所属する皇學館大学でシンポジウム「道教史の新たな展望」を開催した。シンポジウムは、全真教を中心とした学説史の再検討(松下)、経典注釈に関する実証的研究(山田)、道教と民間宗教の関係(馬)、『中国道教史』翻訳の経緯(蜂屋)という構成を取り、各時代分野の断片的な分析にとどまらず、実証的かつ多角的に道教総体を検証し、新たな道教史の再構築の可能性に肉薄することを目指した。

なおこのシンポジウムは本来、最終年度に行う計画であったが、2014年度末には、依然訳注稿の作成が一部残っていたほか、全体を通じての検討や修訂が部分的にしこに進んでいない状況であった。こうしたことから、研究期間を一年延長し、2015年度は、残った部分の訳注の完成作業に全力を傾注した。同時にシンポジウムでの報告を論文としてまとめ、あわせてそこでの議論の成果を『中国道教史』訳注稿に反映させ、研究成果としてま

とめることを目指した。

すなわち本研究では、(1)『中国道教史』の訳注稿作成を軸に、(2)各時代・領域ごとの研究例会を開き、従来の研究を実証的・批判的に検証し、(3)そこでの結果をふまえて、シンポジウム「道教史の新たな展望」を開き、研究結果を総括するという方法を採用したのである。(4)またそうした研究成果が各研究分担者の個別研究へと還元され、学会発表や学術論文へつながるのみならず、『中国道教史』訳注稿の水準を向上させるであろうこともあわせて企図するものであった。

4. 研究成果

本研究は、道教の成立とその後の歴史的な展開について、これまでの研究を実証的・批判的に検証し、新たな道教史の再構築の可能性を探ることを目的としている。またその具体的な研究成果の一つとして任継愈主編『中国道教史』(増訂本、中国社会科学出版社、2001)の訳注稿作成を中心に据えている。

そうした本研究の目的からいっても『中国道教史』執筆陣をはじめとする外国の研究者との交流・協議を積極的にすすめる必要性があった。こうした研究者との交流は道教史の再構築を企図するにあたり、日本人研究者以外の道教研究における視点の違いといった問題点を浮き上がらせる可能性を持ち、重要な意義を有するからである。

実際、こうした目的も兼ねて、2013年11月には米国ラトガース大学の劉迅教授を招聘して研究分担者の森由利亜の所属する早稲田大学において、シンポジウムを開催した。これは日本の若手の道教研究者を中心とする研究会であるタオの会と共催の形で開かれ、特に明代の内丹思想を中心に、アメリカの最新の研究状況や知見を収集することができた。

また本研究では『中国道教史』に見える全ての時代・領域に関する研究例会を継続して開催したほか、それをふまえて2015年3月には研究全体の総括として、シンポジウム「道教史の新たな展望」を開催した。シンポジウムには『中国道教史』の執筆者の一人である中国社会科学院の馬西沙教授も参加したため、このシンポジウムは当初予定していた『中国道教史』執筆陣との学術交流の役割も果たすこととなり、中国の研究者たちの道教研究の現況や最新情報の収集などを行うことができた。

シンポジウム「道教史の新たな展望」では、松下が、金の王嘉により開かれた全真教に対してしばしば用いられてきた「新道教」という用語を取り上げ、それが日中それぞれの歴史的な経緯の中で使われてきた用語であり、そこには歴史的なバイアスがかかっていることを指摘し、「新道教」という用語の限界を指摘した。また『中国道教史』の執筆者でもある馬西沙教授は明清時代の民間宗教と道教の関係について論じ、特に衰退期として

語られることが多いこの時代の道教をどのように捉えるかをめぐって、森や松下などと熱い議論が繰り広げられた。その他、山田が同じく全真教の劉処玄『黄帝陰符経注』を取り上げ、実証主義的な経典注釈に関する報告を行い、また蜂屋は『中国道教史』の主編者である任継愈教授について紹介し、これまでの『中国道教史』翻訳の経緯を報告した。最終年度の2016年3月には、その中の松下の報告(「新道教」再考)と馬教授の報告(「宝巻と道教の煉養思想について」)が『皇學館大学研究開発推進センター紀要』2号に掲載された。

また一年研究期間を延長したものの、研究期間内において、シンポジウムや研究例会の成果をふまえた『中国道教史』訳注稿作成の作業をほぼ完了することができた。こうした作業を通じて、中国におけるひとつの代表的な道教史を日本に紹介し、同時に最新の研究結果を注釈というわかりやすい形で示す準備が整ったといえる。この『中国道教史』訳注稿は分量の関係から四編に分けて成果報告書の形で印刷する予定であり、現在すでに印刷準備に入っている。また印刷された訳注稿を元に再度の修訂を行い、最終的には学術刊行物として正式に出版することを計画している。

その他、本研究で得られた成果は、研究代表者・分担者・協力者の研究に様々な形で還元されている。本研究は道教全体を対象とし、その範囲は広範な分野に及ぶことからここでは一々取り上げないが、学会発表や論著の形でその成果が公表されていることを附言しておく。

本研究の目的は、道教の成立とその後の歴史的な展開について、これまでの研究を実証的・批判的に検証し、新たな道教史の再構築の可能性を探ることであった。最終的に『中国道教史』を訳注稿の形で提示する用意ができたこと、またシンポジウム「道教史の新たな展望」の報告が公刊されたこと等により、本研究の課題については所期の目的を達成し、一定の成果が達成されたといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計38件)

松下道信、牧牛図頌の全真教と道学への影響 一円明老人『上乘修真三要』と謙定「牧牛図詩」を中心に、東方学、査読有、131、2016、34-51

松下道信、「新道教」再考 全真教研究の枠組みについての再検討、皇學館大学研究開発推進センター紀要、査読無、2、2016、65-86

馬西沙(著)・松下道信(訳)、宝巻と道教の煉養思想について、皇學館大学研究開発推進センター紀要、査読無、2、2016、49-63

松下道信、全真教における志・宿根・聖賢の提挈 内丹における身体という場をめぐって、「心身/身心」と環境の哲学(汲古書院) 査読無、4、2016、353-368

長谷部英一、中国医学における身心関係、「心身/身心」と環境の哲学(汲古書院) 査読無、2016、265-284

森由利亜、王常月の三層戒構想と一七世紀江南金陵仏教における戒律改革運動 王常月・漢月法蔵・見月讀體、東洋の思想と宗教、査読無、33、2016、45-66

松下道信、浅談道教对吉田神道の影響 以『北斗経』与内丹学説的關係为中心的考察、全真道研究(齐鲁書社) 査読有、4、2015、59-77

加藤千恵、内丹史試論、第9届“亜洲与発展:宗教与文化”国際學術検討会及“道教學術研究前沿論壇”會議論集、査読無、1、2015、391-394

山田俊、「元陽子」小考、『正學』、査読有、3、2015、216-230

山田俊、夏元鼎思想研究之一 『悟真篇講義』を中心に、九州中國學會報、査読有、53、2015、15-29

山田俊、「安樂法」小考、道教研究學報:宗教、歴史與社會、査読有、7、2015、337-361

長谷部英一、中国古代の求子と胎教、第七屆中日學者中国古代史論壇:中国古代的科學技術与社会 從文学、歴史和科學角度展開的中国古代史研究会會議論文集、査読無、1、2015、91-103

森由利亜、道教の出家戒の成立と継承、仏教文明と世俗秩序 国家・社会・聖地の警世(勉誠出版) 査読無、7、2015、471-489

松下道信、『還丹秘訣養赤子神方』と『抱一函三秘訣』について、集刊東洋学、査読有、110、2014、21-40

加藤千恵、不老不死、學鏡、査読無、111、2014、22-25

森由利亜、道教の出家伝戒儀についての一考察(金明七真、賈全翔、周思得を中心に) 王常月「初真十戒」前史()、早稲田大学大学院文学研究科紀要、査読無、59、2014、39-56

森由利亜、道教の出家伝戒儀三種と沙弥授戒儀 道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』との対比を通じて、多元文化、査読無、3、2014、5-34

山田俊、夏元鼎『悟真篇講義』的思想及其在道教思想上的意義、行道立德 濟世利人 第三屆國際道教論壇論文集(宗教文化出版社) 査読無、2014、51-65

山田俊、唐淳『黄帝陰符経注』の思想と道教思想史上の位置、熊本県立大学大学院文学研究科論集、査読有、2 ち 014、51-65

山田俊、『史記』「老荘与申韓同伝」考、老子与華夏歴史文明伝承創新(社会科学文献出版社) 査読無、2013、413-428

²¹ 森由利亜、「初真十戒」系譜考 王常月「初真十戒」前史()、早稲田大学大学院文

- 学研究科紀要、査読無、58-、2013、21-38
- 22 加藤千恵、相い雑わること錦のごとし「術」の五行、術の思想 医・長生・呪・交霊・風水（風響社）、査読無、2013、29-53
- 23 加藤千恵、道教における養胎の思想、第1回 Templeton 東アジアの科学と宗教国際ワークショップ「東アジア世界の知の伝統：科学と思想、宗教のあいだ」報告書、査読無、2012、117-133

〔学会発表〕(計31件)

- 森由利亜、Three Daoist Rituals of Ordination for Novices Who Leave Their Family from Sixth Century to Fifteenth Century: Preparation for placing Zhou Side 周思得 and Wang Changyue 王常月 in history of ordination ritual of Daoism、Fourth Japan American Daoist Studies Conference (第四回日米道教会議)、2016年3月29日、Pacific Lutheran University, Tacoma, Washington (アメリカ)
- 松下道信、孤陰考 内丹道における陰陽派の存在について、日本道教学会第66回大会、2015年11月14日、東洋大学(東京都文京区)
- 加藤千恵、内丹史試論、回顧与展望：道教與宗教文化研究所建所35周年及道教學術研究前沿問題國際論壇、2015年10月23日、四川省青城山(中華人民共和国)
- 山田 俊、金朝初中期道家道教思想史再考 以時雍《道德真經全解》為例、回顧与展望：道教與宗教文化研究所建所35周年及道教學術研究前沿問題國際論壇、2015年10月22日、四川省青城山(中華人民共和国)
- 森由利亜、Tracing back Wang Changyue's Consecration Ritual for those Who Leave Their Family in History of Daoism、Daoist Lives: Colloque international d'études taoïstes; In honor of Kristofer Schipper's 80's birthday (道教的生活：クリストファー・シペール80歳記念國際道教学会議)、2015年9月11日、Centre Paul Langevin, 73500 Aussois (フランス)
- 長谷部英一、中国古代的胎教思想、第七屆中日學者中国古代史論壇：中国古代的科学技术与社会 從文学、歷史和科学角度展開的中国古代史研究、2015年8月15日、北京市金龍潭大飯店(中華人民共和国)
- 山田 俊、夏元鼎『黄帝陰符經講義』について、古典解釋の東アジア的展開 宗教文獻を中心として第18回会議、2015年4月18日、京都大学人文科学研究所(京都市)
- 松下道信、日本における道教史の諸問題について「新道教」の位置づけをめぐって、道教史の新たな展望、2015年3月7日、皇學館大学(三重県伊勢市)

- 山田 俊、劉處玄『黄帝陰符經注』について、道教史の新たな展望、2015年3月7日、皇學館大学(三重県伊勢市)
- 森由利亜、Jiang Yupu's Jueyuan Altar and the Tradition of the Quanzhen、清代道教研究國際學術研討會 呂祖信仰・乩壇與宗教革新(香港中文大学・パリ高等研究院・早稲田大学総合人文科学研究センター(RILAS)共催シンポジウム)、2014年12月11日、香港中文大学(中華人民共和国)
- 山田 俊、夏元鼎『悟真篇講義』的思想及其在道教思想上的意義、第三屆國際道教論壇、2014年11月24日~28日、中国江西省龍虎山(中華人民共和国)
- 森由利亜、Wang Changyue 王常月, Jianyue Duti 見月讀體, and Hanyue Fazang 漢月法藏: Daoists' Ordination Reform Seen in the Context of Buddhists' Vinaya Reformation in Jiangnan in Seventeenth Century、Daoism and Local Society in Late Imperial and Modern China (アメリカ合衆国ニュージャージー州立ラトガーズ大学中国学センター・孔子学院・同大史学部共催シンポジウム)、2014年11月14日、ニュージャージー州立ラトガーズ大学中国学センター(アメリカ)
- 森由利亜、道教の出家戒の成立と継承、早稲田大学重点領域研究機構・東アジア「仏教」文明研究所主催日韓中国際シンポジウム「仏教文明の拡大と転回」、2014年10月25日、早稲田大学戸山キャンパス第一会議室(東京都豊島区)
- 松下道信、浅談道教影響下吉田神道内丹学説的作用、多元信仰下的全真道研究國際學術研討會、2014年8月14日、山東省棲霞市(中華人民共和国)
- 加藤千恵、『入藥鏡』と煉丹術の原理、京都大学人文科学研究所共同研究班「東アジア伝統医療文化の多角的研究」第二回研究会、2014年7月6日、京都大学人文科学研究所(京都府京都市)
- 山田 俊、唐淳『黄帝陰符經注』とその思想史上の意義、第一回東アジア宗教文化國際學術シンポジウム：東アジア宗教の伝統性と現代性、2014年5月23日~24日、上海市(中華人民共和国)
- 松下道信、円明老人『上乘修真三要』について、遼金西夏史研究会、2014年3月22日、東北大学川内キャンパス・文学部棟3階視聴覚室(宮城県仙台市)
- 山田 俊、北宋に於ける『陰符經』の受容について、日本道教学会第64回大会、2013年11月9日、早稲田大学(東京都豊島区)
- 山田 俊、北宋期『陰符經』諸注淺析、中・日・韓宗教學術論壇 道教與中国文化、2012年12月14日、福建省泉州市華僑大学(中華人民共和国)
- 森由利亜、王常月『初真戒律』について、道教文化研究会、2012年9月29日、國學院大学(東京都渋谷区)

- 21 山田 俊、『史記』「老莊與申韓同傳」考、
2012・中国鹿邑国際老子文化論壇、2012
年 8 月 27 日、河南省鹿邑市(中華人民共和
国)
- 22 松下道信、『還丹秘訣養赤子神方』と『抱
一函三秘訣』について、宋代史研究会、2012
年 8 月 25 日、民宿岩本(静岡県浜松市)
- 23 加藤千恵、道教における養胎の思想、第 1
回 Templeton 東アジアの科学と宗教国際
ワークショップ、2012 年 6 月 21 日～23
日、ソウル大学(韓国)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

松下 道信 (MATSUSHITA MICHINOBU)
皇學館大学・文学部・准教授
研究者番号：9 0 4 5 4 4 5 4

(2)研究分担者

高橋 忠彦 (TAKAHASHI TADAHIKO)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：4 0 1 2 6 1 0 7

加藤千恵 (KATO CHIE)
立教大学・現代心理学部・教授
研究者番号：4 0 5 3 0 2 0 9

山田 俊 (YAMADA TAKASHI)
熊本県立大学・文学部・教授
研究者番号：3 0 2 4 0 0 2 1

長谷部英一 (HASEBE EIICHI)
横浜国立大学・環境情報研究院・准教授
研究者番号：0 0 2 5 1 3 8 0

森由利亜 (MORI YURIA)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：3 0 2 4 7 2 5 9